

猫かぶり御曹司の契約恋人

Miu & Nakaba

加地アヤメ

Ayame Kaji



エタニティ文庫

目次

猫かぶり御曹司の契約恋人

5

猫かぶり御曹司と私のこれから

301

書き下ろし番外編

猫かぶりを止めた御曹司と私の新生活

323

猫かぶり御曹司の契約恋人

一

「お休み!？」

仕事を終えて、意気揚々と向かったお気に入り居酒屋は臨時休業していた。

私——浅香美雨は、灯り一つ点っていない店の前で呆然とする。

今日は朝から、この店の揚げ出し豆腐と、日本酒を楽しみに一日頑張ったのに……でも休みなら仕方ない。それなら別の店に行けばいいだけのことだ。

私は気持ち切り替えて、すぐ近くにある別の居酒屋へ向かった。

しかし、なんとそこもお休み。ならばと、入ったことのない居酒屋の暖簾をくぐるが、そこは満席で一時間は待つとのこと。

——な、なんで？ 神様は私に今日は真っ直ぐ家に帰れと言ってるのか？

しょぼんと肩を落として歩き出した時、いつもは気にも留めない路地の奥に、「BAR」と書かれた看板が見えた。

——あ……あんなところにBARがある。

コンクリート打ちっぱなしの外壁に、存在感のある木製のドア。そこに、「OPEN」という札が下げられていた。なんともおしゃれな雰囲気醸し出している店の外観に、思わず自分の格好をチェックしてしまう。

今日の私は白いシャツに、足首丈のカーキ色のパンツ。カジュアルだけどラフすぎない服装だ。これだったら、おしゃれなBARでもたぶん浮かないはず。

——よし、行こう！

自分にGOサインを出し、私は思い切って店のドアを開ける。すぐにボトルがずらりと並んだバーカウンターが目飛び込んできた。

「いらっしやいませ」

カウンターの中にいる若い男性が、柔らかに微笑んで声をかけてくる。

「こんばんは……」

やや緊張しながら、笑顔を作って会釈した。

こぢんまりした店内は広いバーカウンターと、奥にいくつかテーブル席があるようだ。どこに座ろうか迷っていたら、最初に声をかけてくれた男性に「お好きのところへどうぞ」と言われたので、カウンターの端っこに腰を下ろした。

いつも居酒屋にばかり行っているせいかな、こういったおしゃれな雰囲気は落ち着かない。

しかし、手渡されたメニューに目を通した途端、私のテンションが一気に上がった。

——日本酒がある！

「すみません、この日本酒を冷やてください」

「かしこまりました」

さっきの男性店員が微笑む。

見たところ二十代後半から三十代前半くらいの痩せ型で、背が高い。この方がマスターなのだろうか、笑顔が爽やかでも印象がいい。

何気なく店内に目を向けると、私の席から三つ向こうのカウンター席にカップルが、その向こうには一人で飲んでいる男性客が二組。

マスターらしき人が奥へドリンクを運んでいるから、おそらくテーブル席にもお客様がいるようだ。

——近くにこんなお店があったんだ。日本酒の品揃えもいいし、今度からいつもの居酒屋が休みの日はここに来ようかな。

そんなことを考えていると目の前にグラスが置かれ、一升瓶から透き通った日本酒が注がれる。その様子に、ほう、とため息が漏れた。

——……きれい……

「ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

私は笑顔でお礼を言って、日本酒の入ったグラスを手取る。

今日の気分は純米吟醸。

女性の杜氏が造っているというこのお酒からは、ほんのりとフルーティな香りが漂ってきた。

「いただきます」

一口含むと口の中いっぱいにお米の甘さが広がる。でも、後味はスッキリ。

——くーっ!! 美味しい!!

いつもの居酒屋だったら絶対声に出している。だけど、今日は場所を考えて心の中で美味しく美味しさを噛みしめた。

——あー、この店に入って正解だった。

勇気を出して店に入った自分を褒めてやりたい。

そんなことを考えながら、私はちびちびと日本酒を味わう。

——せっかくだし、何か食べるものが欲しいな……

もう一度メニューを手にとって、軽食の欄をじっと見る。

フライドポテトやスナツクの盛り合わせといった定番メニューの他に、このお店特製ナポリタンやお茶漬け、それに焼き鳥の盛り合わせなどもあるのが意外だった。

メニューを凝視していると、目の前に男性店員が立つ。

「何か召し上がりますか？」

「はい。あの、焼き鳥って、この店で焼くんですか？」

「いえ、近所の焼き鳥屋さんに頼んで持って来たらうんです」

——なるほど。焼き鳥屋さんの焼き鳥だったら、きっと美味しいはず。

「じゃあ、焼き鳥の盛り合わせをください」

「かしこまりました、少々お待ちください」

——バーで焼き鳥って、なんか変な感じ。でも美味しければそれでよしってことで。私は日本酒を一口飲み、ほうっと息をついた。

それから十分くらいして、焼き鳥屋さんが盛り合わせを届けてくれた。

鶏モモの塩とタレが二本ずつ、砂肝にレバー、ボンジリにせせりといった八本の串に、シシトウが二つ彩りで添えられた盛り合わせが私の前に置かれる。

香ばしい匂いにつられて、さっそく鶏モモの塩を口に運ぶ。想像以上に柔らかくジューシーな鶏肉に、ほんのり効いた塩味が旨みを引き立てている。フワッと感じる炭の香ばしさもい。

——美味しゅう……これは日本酒がすすむわあ。

くいつとお酒を飲んで、幸せに包まれる。

この店に来てよかったとしみじみ思いながら、焼き鳥とお酒を楽しんでいると、三つ隣の席に座っているカップルの女性が、突然ガタンと音をたてて立ち上がった。

「つ……なによ、馬鹿にしてっ……もういいわよっ!!」

長い巻き髪に、膝丈のワンピースを着た美しい女性。彼女は顔を真っ赤にしてそう吐き捨てる、いきなりお酒の入ったグラスを掴み勢いよく中身を隣の男性の顔にぶちまけた。

——ひっ!!

思わず声を出しそうになって、私は慌てて口を噛む。

「ふんっ、いい気味!」

そう捨て台詞を残し、女性は勢いよくバッグを掴みヒールの音を立て店を出て行った。——……しゅ、修羅場だ……初めて見た……!

自然と店内にいる人間の視線が一人残された男性に集まる。男性は出て行った女性を追うことなく、俯いたまま微動だにしない。

男性の顔を半分覆い隠している長い前髪からは、ポタポタと雫が滴っている。

それに気づいた私とマスターが、ほぼ同時に彼におしぼりを差し出した。

「これ、使ってください」

私とマスターの声が綺麗にハモる。

微かに反応した男性が、前傾姿勢のまま私とマスターに一礼する。

「……お恥ずかしいところを見せて申し訳ない」

受け取ったおしほりで顔と前髪を拭った後、男性はマスターが持つて来たモップを「俺がやるから」と言つて、自ら濡れた床を丁寧に拭いて再び席についた。

——あんな目に遭つたのに、意外と冷静……

なんとなく彼から視線を逸らせずにいると、その視線に気がついたのか、男性が濡れた前髪を掻き上げつつ私の方を向いた。

「騒がしくして悪かった。よかつたら一杯ご馳走させてほしい」

「え」

頭を下げられたことよりも、男性の顔の美しさに驚いた。

涼しげな眉の下に、くつきりとした二重瞼の綺麗なアーモンド形の目。すつと通った鼻梁と綺麗な唇。それらのパーツが、絶妙なバランスで配置されていた。

普段なかなか見ることがないくらいの超美形に、思わずポカンと口を開ける。

「……あ、あの、いえ、そんな、いいですよ」

これほどのイケメンと話す機会などないから、緊張してしまふ。

「もう帰るところ？」

「いえ、そういうわけではないのですが……」

——自分がどんな目に遭つたかお忘れですか？

「じゃあ一杯だけ、俺の飲み直しに付き合ってくれないかな。……それ、日本酒？」

彼が私の手元を覗き込んでくる。

「あ、はい」

「同じものをもう一杯どう？ 別のでもいいけど」

そう言われてしまうと、遠慮するのも申し訳ない気がして、お言葉に甘えることにした。

「じゃあ一杯だけ……」

「ありがとう」

彼はカウンターにいた男性客にも同じように謝つて、マスターにお代わりを注文する。——気遣いの人だ……すごいイケメンだし。さっきの女の人は、何にあんなに腹を立てたんだろう？

余計なお世話だと思いつつ、そんなことが気になってしまふ。

「……あの。彼女、追いかけて大丈夫だったんですか？ さっきの……」

彼はグラスにわずかばかり残っていたドリンクを飲み干して、私を見る。

「……隣、座つても？」

「どうぞ」

男性がグラスを手に、私の隣に移動してきた。

「彼女とは、もう会うことはないから大丈夫」

涼しい顔で、さらっとそんなことを言われたから驚く。

何があつたか知らないけど、そんな簡単に別れを決めてしまつていいのだろうか？ ……まあ、いきなりお酒をぶっかける彼女も彼女だけど……

「でも、恋人ならもうちよつと何か話し合つたり……とかか？」

私が口を出すのも変だけど、ついモヤつとしてそう言つと、男性に「ちよつと待つて」と話を切られた。

「彼女とは付き合っていないから」

「……え？ そうなんですか？」

男性は困つたように頭を掻き、マスターに手渡されたばかりの焼酎の水割りを呷つた。

「ただの勘違い女だよ。こつちがそれを指摘したら、逆ギレされただけ」

「そ、そうでしたか」

——言い方はともかく、あの女性が怒つた理由が、なんとなく分かつた……

さりげなく男性から目を逸らし、私は新しいお酒を飲みつつヤレヤレと思う。

そんな私を見て、男性はフツと表情を和らげた。

「自信満々なタイプだったからな。自分が断られるとは思つてなかつたんだろう」

男性がうんざりした様子でグラスに口を付ける。

そんな仕事も、いちいち絵になるな、この人。……言つてることは酷いけど。

「すごく綺麗な人でしたけど、後悔したりしませんか？」

何気なく質問すると、彼は静かに首を横に振る。

「いくら顔がよくても……自分が一番な上、思い込みが激しい女はご免被りたいね」

「……まあ、お酒ぶっかけるとか、普通なかなかしませんか？……」

少なくとも私なら、やつた後が怖くて絶対にできない。

ほそつと呟いたら、意外にも彼がそれに食いついた。

「だろ？ いきなり突拍子もないこと言う女でさ……初めて会つた日を私達の出会いの記念日にしましょう、とか言い出した時は何言つてんだつて思った。ちなみに、会うのは今日が二度目」

「えっ！ それって、会つて二回目……しかも付き合っていないのに!？」

「そう。だから勘違いを指摘して、お帰りいただいた」

そう言つて彼は肩を竦める。

「それなのに、よくお酒ぶっかけられて怒りませんでしたね。私だったらやり返してる

かも……」

「何、短気なの？」

「短気……じゃないと思いますけど、理不尽なことは我慢できないかもしれません。……あの、なんてお呼びすればいいですか……?」

偶然一緒になった相手に名前なんか聞いていいのかな、と思いつつ尋ねた。だが、意外にも男性はあっさり名前を教えてください。

「両角。そっちは?」

「浅香です」

名乗った途端、両角さんは何かを考えるようにじつと私を見つめてくる。そんな綺麗な目に見つめられると、非常に落ち着かない。

「……な、何か?」

「いや、浅香って名字? それとも名前?」

「ああ、名字です。深い浅いの浅いに香り」

私の名字『あさか』は、女性の名前でも通用するので、たまにこういった疑問を抱かれることがある。

「へえ。じゃあ、名前はなんていうの」

両角さんがグラスを傾けながら尋ねてきた。

「美雨です。美しい雨って書きます」

「へえ、いい名前だね」

「……そうですか?」

「美しい雨、だろ? しつとりして綺麗な名前だと思う」

そう言つて、彼は静かに焼酎の水割りを口に運ぶ。

さつきあんなに辛辣なことを言っていた人から、名前を褒められるとは思わなかった。びっくりした私は、彼につられるように奢ってもらった日本酒を飲む。

「ありがとうございます……」

——なんか、こんなイケメンに綺麗な名前とか言われると、本当にそんな気がしてくるから不思議だ。

お酒までさつきよりも美味しく感じるの、なんでだろう。

そんなことを思っていたら、隣の両角さんが頬杖をつきながら口を開いた。

「……さつきも思ったんだけど、あんた、えらく旨そうに酒を飲むな」

「そりゃあ、お酒が美味しんですから当然です……って、さつきも?」

思わず聞き返すと、両角さんが頷く。

「……若い女性が一人で入ってきたな、と思つて見てたら、嬉々として日本酒を注文して旨そうに飲んでるからさ。そんなに日本酒好きなの?」

「はい、まあ……。といつても、好きになったのはここ数年なんですけど」

「へえ。何かきっかけも?」

「両角さんが興味深そうに身を乗り出して来る。
「きつかけかどうか分かりませんが、私つい最近まで、仕事で酒蔵の多い地方の町にいたんです」

私が勤務するM・Oエレクトロニクスは、それなりに大きい生活家電メーカーだ。

私は五年ほど前、事務職として本社に採用された。しかし、新入社員は全員、入社から五年以内に半年間の工場研修に行かなければいけないという規則があった。

本社に勤務する社員のほとんどが、近くの工場で研修を受けるところ、私はせっかくなら本社から離れた場所がいいと思った。そこで自ら志願して、中部地方にある工場に研修を受けることにしたので。

工場のある町には酒蔵が多くあり、たまたま居酒屋で知り合った酒蔵経営者から、日本酒の美味しさを教えてもらったのである。

それ以来、私はすっかり日本酒の魅力に取り憑かれてしまったというわけだ。

「なるほどね。確かに地方にはいい酒がたくさんあるからな。俺もここ数年は地方に行ったり海外に行ったりしてるけど、行く先々で旨い酒に巡り会うんだよな」

両角さんが頬杖をついたまま何度も頷く。

彼の意見に、私も激しく同意した。

「そうなんですよー！ 町のスーパーにまですごい種類の地酒が置いてあるんです。そ

ういう場所には、地元の特産品とか、美味しいおつまみもたくさんあって。結局私、半年で終わる研修を二年もしたんですよね」

そう話す私に、両角さんがハハッと声を出して笑った。

「それもすごいな」

「本当はもっと向こうにいたかったんです。でも会社の規定で、研修は最長で二年までって決まってたからやむなく……」

私個人としては、あのまま地方にいても全然構わなかった。だが、企業に勤める一社員としては、規定に背いてまで居続けることはできず、涙を吞んで本社に戻ってきたというわけだ。

「久しぶりにこっちに帰ってきて、いろいろとお店を開拓中なんです。このお店には今月初めて来ましたが、日本酒の品揃えが豊富で本当たりでした。両角さんはよく来るんですか？」

「ああ。マスターと知り合いでね」

そう言いながら両角さんがマスターに視線を向けると、ちょうど正面にいたマスターがにっこりと微笑む。

「両角さんには、いつもご虫貞にしていたいで。ありがとうございます」

「何、改まって。長い付き合いだろ」

爽やかにお礼を言うマスターに両角さんが苦笑した。

「それにしても……浅香さんの話を聞いてたら、俺も日本酒が飲みたくなってるな。家に眠ってる一升瓶、引つ張り出すか」

その言葉に敏感に反応する私。

「眠ってる一升瓶？」

「ん、ああ。地方に行った時に知人から貰ったり、季節の贈答品とかが大量にあるんだよ。俺も日本酒は好きだけど、さすがに一人じゃ消費しきれなくて結構な量がキッチン奥で眠ってるんだ。中には幻とか言われてるレアな酒もあってさ……」

——マボロシ……？ 何それすつごく気になる……！

「そんないい日本酒を眠らせておくなんて勿体ないですよ。ぜひ飲んでください。私であれば、いつでもお手伝いしますんで！」

「いつかお願いするかもな」

つい力が入ってしまった私に、両角さんは楽しそうに笑った。そして、マスターに焼酎のお代わりを頼む。

私は、そんなリラックスした様子の彼をしみじみと眺めた。

出合いのインパクトとびっくりするほど綺麗な顔。

ひょんなことから一緒に飲むことになった両角さんは、すごく話しやすい人だった。

正直、初対面でここまで気楽に話ができた異性って、ちょっと記憶にないかも。

——この人となら、いくらでも喋っていられる気がする……

なんて思っていたら、あつという間に二時間以上経過していた。

スマホにきたメルマガの着信で現在時刻を知った私は、驚きのあまり大声を上げてしまった。

「うそ、もうこんな時間!? 早っ……」

お詫びで一杯奢ってもらっただけのはずが、いつの間にか!

「ほんとだ……全然気づかなかったな。マスター」

両角さんは左腕の腕時計を見ながら、マスターに声をかける。

二人が話している間、周囲を見回すと、いつの間にか店内の客は私と両角さんだけになっていた。

——カウンターに座ってた人、いつ帰ったんだろう? 全然気がつかなかった。

つまり、それだけ両角さんとの会話に夢中になっていたということだ。

そう思ったら、なんだか恥ずかしくなってしまった。

両角さんがマスターとの話を終え椅子から立ち上がったので、私も慌てて立ち上がる。

「ご馳走さまでした。お会計を……」

バッグから財布を取り出しながら声をかけると、につこり微笑んだマスターに止めら

れる。

「お客様の分も両角さんにいただきましたので、お代は結構です。ぜひまた、ご来店を待ちしております」

一瞬、言われた内容が頭に入ってこなかった。でも、すぐに隣の両角さんを見る。

「両角さん、奢おごつてもらうのは最初一杯だけでいいです。自分の分は自分で払いますから」

「ただ両角さんは、いらないとばかりに手をヒラヒラさせ、そのまま店を出て行くようにする。」

困惑しつつ、私は彼の後を追う。

店を出てすぐ両角さんが立ち止まったので、急いでお金を差し出した。

「いらなくて。これは今日のお礼」

「でも……」

なんだかんだで、あの後二人でかなり飲んでしまったのに、いいのだろうか。

私がお金を持ったまま躊躇ためっていると、いいんだよと真顔で手を押し返される。

「イヤな思いした後には、それを帳消しにするくらい楽しい時間を過ごさせてもらったんだ。だからいいんだよ。はい、この話はもう終わり」

そんな風に言われたら、これ以上遠慮するのも悪いような気がしてくる。

「分かりました。じゃあ、お言葉に甘えてご馳走ちそうになります」

「ああ。で、浅香さんはこの後どうやって帰るの」

「歩いて帰ります。マンションが近いので……それじゃ……」

一礼して一歩足を踏み出すと、何故か両角さんも同じ方向に歩き出した。

「……両角さんもこっちなんですか？」

驚いて尋ねると、背の高い彼が私を見下ろしてくる。

「いや。家の近くまで送るよ。こんな夜中に女性の一人歩きは危険だから」

「大丈夫ですよ。私のマンション、商店街の近くだから夜でも結構明るいですし」

「だめ。遅くなったのは俺のせいだし、マンションに入るまで見届けさせて。ほら、こっちでいいの?」

「あ、はい……なんか、すみません」

あっさり「いいよ」と言って、彼は私の半歩先を歩く。

両角さんは並んでみると、かなり背が高く脚も長い。ゆえに一歩が大きかった。

それに合わせて歩いていたからか、それとも会話をしていたからか理由は分からないが、いつもより家までの距離が短く感じた。

「ここです」

あつという間に到着したマンションの前で、両角さんと向かい合わせになる。

「今日は本当にありがとうございました。何から何まで……」
 お奢おごってもらって、送ってもらって。なんだか申し訳ない。
 私が深々と頭を下げると、両角さんがぶつきらぼうに言い放つ。
 「俺あの店にちよくちよく入り浸ひたってるから、気が向いたら来なよ。また一緒に飲もう」

「そうですね。ぜひ一緒に一緒にしたいです」

「じゃあ、また。おやすみ」

両角さんが踵かかひを返す。その背中に向かって、私も声をかけた。

「はい。おやすみなさい」

前を向いたまま手をヒラヒラさせて、両角さんが来た道に戻って行く。

——いい人だったな、両角さん。また会えたらいいな。

そんなことを思いながら、私は上機嫌で自分の部屋に帰ったのだった。

二

両角さんとの出会いから数日後の月曜日。

「では、お待ちしております。はい、失礼いたします」

中途採用の求人に応募してきた人との電話を終え、受話器を置く。電話で確認した情報をまとめ、採用担当者に渡したところで、ちょうどお昼のチャイムが鳴った。

M・Oエレクトロニクスの本社に戻った私が所属しているのは人事部。そこで、社員の社会保険などの労務管理や、人事企画の資料作成、求職者の問い合わせ対応などを担当している。

地方での二年間は工場の製造ラインに入って作業をしていたので、久しぶりの本社勤務に慣れるまで少々時間がかかった。でも今は、まったく問題なく仕事をこなしている。

——さて、お昼は何を食べようか。

この会社には社員食堂があるが、今日はなんとなくインドカレーが食べたい気分。そう思った私は、会社近くのインドカレー屋にカレー弁当を買って行った。

インド人シェフが作るこの店のバターチキンカレーは、私的に美味おいしいカレーランキング第一位。

うちの社員にも人気のこのカレー弁当は、ランチタイムになるとあっという間に売り切れてしまうこともあるので、無事にゲットできた私はホクホクしながら社に戻った。手元から漂たなってくるスパイスの効いたカレーの匂いに、私のテンションは爆上がり。

——うーん、いい香り……!! 早く食べた……!!

エントランスからエレベーターホールに向かって歩いてみると、ちょうど同じ部署の女性が前からやって来た。二年先輩の山口優紀さんだ。

山口さんは私が新入社員の頃からお世話になっていてる人で、本社に戻って彼女と同じ部署になれたのはラッキーだった。

山口さんは細身で目がくりつとした可愛い顔立ちの女性で、数年前に学生の頃からお付き合っていた男性と結婚した既婚者である。

「あら、いい匂いがするわねー、もしかしてインドカレー?」
 くん、と匂いを嗅いだ後、彼女は私の手元に視線を落とす。

「はい。ひとつ走りしてきました」

「私も食べたくなくなってきたなー。今から買いに行こうかな」

「今日はまだありましたよ、バターチキンカレー弁当」

なんて話をしていると、急に周囲が騒がしくなった。

キャーッという黄色い声と共に、私達の横を若い女性社員が通り過ぎていく。何事かとそちらに目をやると、若い女性で人だかりができていた。

「――ほら！ 王子様よ、王子様！ 姿見られて今日はついてる〜!!」

「ねー！ 目の保養目の保養！」

――王子様ってなんだ？

耳に入ってきた女性社員達の言葉に、私は目を丸くする。

「……山口さん、なんか王子様とか聞こえませんでした?」

首を傾げる私に、山口さんが笑い出した。

「そっか。浅香さんは最近こっちに帰って来たから知らないか。あの人達の言う王子様って、社長の息子のことよ」

「……社長の息子? その人が王子様って言われてるんですか?」

キョトンとして聞き返すと、山口さんも苦笑する。

「そう。それだけ聞くとちょっと笑っちゃうかもしれないけど、でも確かに王子様みたいな外見なのよ。きれいな顔でいつもにこやかで、怒ったところなんか誰も見たことないんじゃない? だからいつの間にか女性社員から王子様って呼ばれるようになってね」

本社に戻ってしばらく経つのに、そんな人がいることをまったく知らなかった。思わず私は、口を開けたままぼかんとする。

「……初耳です。地方に行く前も、しばらく本社に勤務してましたけど、そんな話は一度も……」

だよねえ、と山口さんが苦笑する。

「王子様って、私と同じくらいの年なんだけど、入社以来海外やら地方やらを転々とし

てたからね。ちょうど浅香さんと入れ替わりに本社へ戻って来たのよ。最初は経営企画部に配属されたけど、この春から常務取締役だ」

「そうなんですね……」

私は少し離れたところにある人だかりに何気なく目を向ける。

——王子様っていうくらいだから、目のぼつちりしたアイドルみたいな感じ？

しばらくすると、人だかりがばらけて、中心にいる人の顔がはっきり見えるようになった。

スーツをきつちりと着こなした背の高い紳士。もしやこの人が噂の王子様？

なんて思いながらその顔を見て、息を呑んだ。

——……あれっ？　なんで両角さんがここに……

すらりとした背格好と、少し長めの前髪、その下にある綺麗な顔……やっぱり両角さんにはか見えなない。

顔を見たまま立ち止まっていると、不意にこちらを向いた両角さんと目が合った。

その瞬間、彼の表情が強張る。

だけど、すぐに後ろから来た社員に声をかけられ、私から目を逸らした。そのまま両角さんは、こちらを見ることなく歩いて行ってしまった。

「浅香さん、どうしたの？」

山口さんが、不思議そうに顔を覗き込んでくる。

「山口さん……あの、社長の息子って……」

私は気持ちを落ち着かせながら彼女に尋ねる。

「あ、うん。今の人がそうだよ」

まさか両角さんが同じ会社の人で、しかも社長の息子だなんて。

思いがけない偶然にびっくりだ。

——世間って思ったより狭いんだな。

あの夜のことを思い出すと、少々気まずい。

知らなかったとはいえ、自社の社長の息子とサシ飲みしてしまった。……私、両角さんに失礼なこととかしてないよね？

——それにしても、両角さんが王子様？

確かに顔は抜群に綺麗だったけど……結構辛辣なことを言ってたし、そこまでニコニコもしてなかった。むしろ、ぶっきらぼうな印象で……

あの夜の彼を思い返すと、とても『王子様』とは思えない。

イメージが違いすぎて理解に苦しむ私は首を傾げる。

なんか考えれば考えるほど、頭がこんがらがってきた。

——ま、いいか。こんな偶然もあるんだなって……！

せっかくいい飲み友達ができたと思ったのに残念だ。さすがに自社の常務とサシ飲みはできない。

部署に戻った私は気持ちを切り替えて、買ってきたカレーを食べて午後の仕事に備えた。

その翌日。

午前の仕事が一通り片付いた私は、各部署に届ける書類を手に席を立った。

人事部の一つ上の階にある営業部や宣伝部に届け物をしていると、出入り口の辺りで女性数人に囲まれている背の高い男性が視界に入った。

——あれ、両角さん？

「ええ。では、よろしくお願ひしますね」

「はい……！」

美しい微笑みと美声でそうお願ひされた女性社員達は、みんなうつとりした顔をしている。完全に目がハートになっていた。

——これが王子様の威力か……!! 凄まじいな。

横目でチラ見しながらその場を後にした私だが、何故か今日は同じような場面に何度も遭遇した。王子様の威力は女性社員に対してだけでなく、時には若い男性社員だった

り、彼よりずっと年上の社員に対しても発揮されるらしい。

誰に対してもキラキラした笑顔で分け隔てなく接している両角さんを見ると、ますます彼があ夜の両角さんと同一人物だと思えなくなってきた。

——……もしかして双子の兄弟、とか？

度々遭遇する両角さんらしき人を、ついまじまじと眺めてしまう。その時、彼がこっちを見たような気がした。

——ん？ 気のせいかな。

特に気にせず、私は部署に戻っていつも通り仕事をこなし、順調に今日のノルマを片付けていった。この調子なら定時には仕事を終え、会社を出ることができそうだ。

——今日は何をつまみに一杯やるのかな。

帰りにスーパーでお刺身でも買っていこうか……マグロもいいし、カンパチもいいな。なんて考えているうちに終業時刻を迎え、私はいそいそと荷物をまとめ始める。

そんな中、にわかに部署内がざわついた。しかもみんなが私を見ている気がする。

——なんだろう。

その時、私の肩にポン、と誰かの手が置かれた。

「ん？」

何気なく振り返ると、そこには麗しく微笑む両角さんの姿が。

「も、もろず……常務!？」

——な、なんでこの人がこんなところに!？」

まさか会社で声をかけられるとは思わず、私は激しく動揺する。目を白黒させている私に、彼が微笑みを保ったまま口を開いた。

「人事部の浅香美雨さん。帰るところ悪いけど、少し時間をもらっていいかな？」

言葉は優しいが、綺麗な目が笑っていない。これは断れないやつだ。

「えっ……あの……はい……!?」

思わず周囲に目をやると、同僚達の強すぎる視線に息を呑む。

——こんなに注目浴びたのって、人生初かも……っ!

周囲の視線に表情を引き攣らせる私に、両角さんが「こっちへ」と先に立って部署を出て行く。

私は荷物を手に、両角さんの後を追った。

廊下の角を曲がったところで、前を歩く両角さんが振り返る。

「急に悪かったな」

両角さんは、さっきまでのキラキラ王子様とは打って変わった真顔で話しかけてきた。

これは、この前バーで会った両角さんだ——そう思った途端、一気に緊張が緩んで体から力が抜ける。

「もう、急に驚くじゃないですか!! 両角さん、この前と全然雰囲気が違うし、別人かと思いましたよ。それに、社長の息子で……常務で、王子様って……そんな人がただの社員を呼び出すって」

軽くパニック気味の私は、立場を忘れて両角さんに捲し立てる。

あんな風に公衆の面前で呼び出すなんて、本当にやめてもらいたい。でも常務である両角さんに、文句など言えないし。

言いたいことはいっぱいあるのに、上手く言葉が出てこなくてもどかしい。

でも、両角さんは私が何を言いたいのか、きちんと分かっているようだった。

「その辺について話したい。この後、時間あるか」

「え? じ、時間?」

「少しでいい」

じっと私を見る彼の真剣な表情を見てしまうと、とても断ることはできなかった。

「……………分かりました」

直後、両角さんが私の耳に顔を近づけてきた。驚いて体がビクッと跳ねる。

「ちょっととちよつとつ、近いですよ!」

過剰反応と思われるでも、こんな超のつくイケメンになど免疫がないのだ。こればかりは動揺しても致し方ない。

「会社を出て、右に百メートルくらい行った先でまた右に曲がると、『あおば』っていう居酒屋がある。そこで待っててくれ。俺もすぐに行く」
 声と共に彼の吐息が耳にかかり、背中がぞくぞくした。
 反射的に耳に手を当て、両角さんを見上げる。

「じゃあ、あとで」

そう言っただけ、彼は足早にこの場から去って行った。

そんな彼の後ろ姿を見ながら、私はわけが分からずばかりと立ち尽くす。

——これは……面倒事に巻き込まれそうなの、いやな予感がする。

できればこのまま真っ直ぐ家に帰りたい……でも、一社員でしかない私は、常務である両角さんの命令には逆らえないのが現実。

仕方なく、指定された居酒屋に向かうことにした。

会社を出て、ひとまず右へ進む。百メートルほど行ったらまた右、なんて言っただけ、場所がよく分からない。仕方なくスマホの地図で『あおば』という居酒屋を検索する。

「あおば、あおば……あ、あった」

四階建てのビルの一階にある、赤い提灯がぶら下がった居酒屋。その看板にはしっかりと『あおば』と記されている。レトロな店の外観は、昔ながらの焼き鳥屋という

感じ。

——洪い……一人だったら入るのを躊躇ちゆうちゆうしてしまいそう。

カラカラ、と引き戸を開ける。店内は想像していた通りこぢんまりとしていた。カウンターに男性客が二人いて、焼き鳥を片手にビールを味わっている。

「いらっしやい」

「こんばんは……」

カウンターのの中から声をかけてきたのは、かなり年配の男性だった。おそらく還暦かんしきはとうに過ぎていると思われる。

どこに座ればいいのか……一応待ち合わせだしようしよう。

「すみません、人と待ち合わせをしていて……」

迷った末に、カウンターの中の店主らしき男性に声をかける。すると、にこっと微笑まれた。

「ああ、聞いているよ。両角のぼうずだろ。奥に個室があるから、そこで待っててくれとさ。先に何か飲むかい？」

両角のぼうず。

つまり、この方は両角さんのことをよく知る人ということか。

それを聞いて、私の緊張が少し和らやわいだ。

「いえ。両角さんが来るまで待ちます」

普段なら、待ち合わせの相手が来る前に一杯やっていたと思う。でも彼の正体を知った以上、私に先に酒を飲むという選択肢は存在しない。

「あいよ。じゃあ、奥にどうぞ」

「失礼します」

頭を下げながら奥へと移動すると、暖簾のれんのかかった入口を発見。中は、大人四人が座るのが精一杯といった広さの部屋だった。壁には手書きのお勧めがいくつも貼られていて、つい目が釘付けになる。

「うわ、この店いいな。私の好きな感じ」

席に座って、筆で書かれたメニューを眺める。想像していたよりかなり豊富なメニューに驚いた。

——へー、焼き鳥でも、いろんな部位が食べられるんだ。

豊富な料理のメニューに、つい飲み物にも期待が高まる。テーブルの上にあったドリンクメニューを開くと、全国各地の日本酒の銘柄がずらっと並んでいた。

私のテンションが一気に上がる。

——すごいっ、こんなに種類があるんだ！

両角さんのことをすっかり忘れて、私が日本酒のメニューをじっくり眺めていると、

入口の暖簾のれんがフワツと持ち上がり、ダークグレーのスーツを着た両角さんが姿を現した。

「待たせたな」

そう言って、両角さんはすると私の目の前の席に座った。彼は着ていたジャケットを脱ぎ、無造作に置いた。

「お、お疲れ様です、思ったより早かったですね」

「定時で帰ろうとしてたくらいだ、浅香さんも忙しいんだろ。時間を取らせちゃ悪いしな」

「……すみません、気を使っていたら……」

近所のスーパールのタイムセールで、刺身を買って帰ろうと思ってただけなんです……とは言えず、ぐっと言葉を呑み込んだ。

何か言おうとした両角さんが、ふと私の手元に視線を落とす。

「何か注文した？」

「いえ、まだです。両角さ……いえ、常務が来てからにしようと思って」

そう言くと、両角さんの口元が少しだけ緩む。

「両角でいいよ。浅香さんは日本酒？」

「えっと……じゃあ、この日本酒を冷やでお願いします」

メニューを見て希望の銘柄を伝えると、両角さんが店主の男性を呼んだ。

「ありがとうございます」

「いや。つまみは適当に頼んでいい?」

「はい」

両角さんが注文をしているのを、ぼんやりと眺める。今の彼は、私が以前会った彼と同じように感じた。

じゃあ、会社での、あの『王子様』な彼は一体なんなんだろう……?」

そんなことを考えていると、注文を終えた両角さんが私の顔を見た。

「まさか同じ会社だったとはな。この前、名刺渡ししておけばよかった……」

彼は眉間を押さえてハァーとため息をつく。

確かに。そうすればあの場でお互い同じ会社だと分かっただろう。

「お待ちどおさまー、生中と日本酒お持ちしましたー」

若い店員さんが飲み物を持って来た。っていうか他にも店員さんいたんだ。

目の前には大好きな日本酒。いつもだったらすぐに手を伸ばしているところだけど、今日は両角さんが気になってお酒に手を伸ばせない。

すると、両角さんがビールのジョッキを持って、目の高さに掲げる。

「……とりあえず乾杯」

私は慌ててグラスを持って同じようにした。

「か、乾杯……」

すぐに両角さんがビールを呷ったので、私も日本酒に口をつける。

頼んだのは、地方にいる時に知って以来、大好きでよく飲んで銘柄。すっきりした味わいで華やかな香りのする純米吟醸だ。

いつもならその美味しさにうっとりするところだけど、目の前で眉間に皺を寄せている人が気になってそれどころじゃない。

それにしても、自分から話があると言ってきた両角さんが、全然口を開かない。これはよほど言いにくいことなのだろうか……

——どうしよう、私から聞いちゃう? でもここは待つべきか……

待った方がいいのは分かるけど、このままじゃせっつかくのお酒を美味しく味わえない。私は意を決して、何やら考え込んでいる両角さんに声をかけた。

「……あの。一つ聞いてもいいでしょうか」

「あ、ああ……」

「本当の両角さんはどっちなんですか?」

私の質問に、両角さんの表情がピシッと強張る。そして、観念した様子でため息をついた。

「……こっち」

それを聞いて、やっぱり、と少しだけ胸のつかえが取れる。

「じゃあ、会社のあれは……」

この人について、そんなに深く知っているわけじゃない。けど、会社のあれは別人だと思った。

深々とため息をついた両角さんは、ビールを一口飲んでゆっくりと話し出す。

「……うちの会社を創業したのは、俺の曾祖父で、ここまで大きくしたのは父なんだ。そのことは知ってるか」

「はい。三代目の現社長が就任してから、徐々に事業を拡大していったんですよね？」
 「そうだ。曾祖父が始めた小さな電器屋が、今のM・Oエレクトロニクスのもとになっている。だけどここに至るまでには、並々ならぬ苦労があったんだ——主に父の」

それはそうだろう。今やM・Oエレクトロニクスは国内はおろか、海外にも支社や工場を持つ大企業だ。ちよつとやそつとの努力じゃこんな会社は大きくできないことくらい、私にだって分かる。

「曾祖父の始めた電器屋を祖父が引き継いだ。元々商才があった祖父の力で、いくつものヒット商品が生まれた。祖父はそれをもとに、会社を大きくすることを考えたそうだ。だが祖父は、思わぬ問題にぶち当たった」

「……も、問題、とは？」

「祖父は商才はあったが、人望がなかったんだ」

——あっちゃー。それは痛い。

なんて正直に言うわけにもいかないので、私はキュツと口を引き結んで相槌を打つに留める。

「もともと職人氣質かたぎで融通ゆづうが利かない性格だった祖父は、物を作ることに長けていたが、気性が荒かった。そのせいで周りに敵を作りやすかったんだ。祖父が社長では、会社を大きくすることはできない。そう判断した曾祖父が、父を社長にするよう命じたさうだ」

——なんだかノンフィクション番組を観ている気分になってくる。

「父は祖父とは違い、かなり温厚な性格だね。祖父ほどの商才はなかったが、周囲の人には恵まれていた。そのおかげで会社はどんどん大きくなっていったというわけだ」

「そうだったんですね……」

——じゃあ、社長は何をそんなに苦労したのだろう……?」

その疑問が顔に出ていたのか、両角さんがすぐに答えをくれた。

「祖父のせいで関係がこじれた人や企業の信頼を取り戻し、もとの関係を築くのに、父は相当苦労したらしい」

「ああ、なるほど……」

納得して何度も頷く私を、両角さんがじっと見つめる。

「俺は、そんな祖父に気性が似ているらしい」

「……え!？」

驚いて、まじまじと両角さんを見つめる。

「だから俺はこの会社を継ぐにあたって、父から一つ条件を出されたんだ」

「条件……ですか？」

私はごくくりと息を呑んだ。

「人前では常に温厚な態度を崩さず、祖父似のカツとなりやすい性格は絶対に表には出さない。それが、俺が後継者になる最低条件だよ」

話し終えた両角さんがごくくくとビールを啜る。

それを聞いて、なんとなく話が見えた気がした。

「なるほど、だから……でも、温厚な態度が、なんで王子様になっちゃったんです？」

そう聞いた瞬間、両角さんがうんざり、といった顔をする。

「知らん。誰かがいつの間にか王子と呼び始め、俺の知らないところで勝手にキャラができ上がってしまったんだ。修正しようにも思った以上にイメージが浸透してて、今更遑うと言えなくなった。仕方なく、そのまま……」

話しながら、両角さんは自分の額を押さえて、がっくりと頊垂れてしまう。

「……そ、そうだったんですね……」

なんとも言えない事情に、私はそれ以上かける言葉を見つけられない。

「で、ここからが本題だよ」

本題？ と首を傾げる。両角さんが顔を上げ、私の顔をじっと見てきた。

正面から見つめられただけなのに、無意識に怯みそうになる。

——イケメンの迫力、本当に凄まじい……

「俺がキャラを作っているということ、会社では秘密にしておいてもらいたい」

ようやく今日呼び出された理由に合点がいった。

「それはもちろん……バラしたりしません。もしかして、これまでもこうやって口止めを？」

「いや」

「え？」

「物心ついた頃からあのキャラで通してるんだ。同僚や友人ですら、俺がキャラを作っていることを知らない。このことを知っているのは、家族と親しい親族。あとあの店のマスターと、今いる焼き鳥屋の店主、そして君だけだ」

「……は？」

ちよっと何言ってるかよく分かんないんですけど。

「ちよ、ちょっと待ってください……お友達も知らない!? じゃあ彼女とかにはどうやって接してたんですか!」

「もちろんあのキャラで」

両角さんがしれっと言うので、こっちは嘩然とするしかない。

「嘘でしょ!? 好きな人の前でもキャラ作るって……なんでそこまで?」

驚きすぎて敬語がどっかへいってしまった。でもそのことに、私も両角さんもまったく気づいていない。

「これまで付き合った女性は、みんな表向きの俺を気に入って近づいてきたんだ。素なんか出せるか。まあ、そのせいで誰とも長く続かなかったけどな」

そう言っただけで両角さんが肩を竦める。

「ならもう、一生王子様キャラで通せばいいじゃないですか。そうすれば、こうやって私に口止めする必要もなくなるわけだし……」

「それは無理だ。適度に息抜きしないと、表情筋が保てない」

「ええ〜」

キラキラ王子様とはほど遠いしかめっ面の両角さんに、私は開いた口が塞がらない。

「だから最近、たまたま酔って本性を出してしまったあのバーで、定期的にストレスを発散させてもらってたんだ」

「……そんなに昔から周囲に気を使っていた人が、なんでこんな初対面の人間の前で素を出したりしたんですか」

——家族と親しい親族の他に、マスターとこの店のご主人と私しか知らないん

て……そんな特別重すぎる。

つい恨み事の一つも言いたくなるというものだ。

すると、両角さんは私に視線を送って、ハア〜とため息をついた。

「あの日は、一人でバーに入ったら、後をつけてきた勘違い女が押しかけてきたんだ。せっかくの時間を潰されてイライラしたところに、わけ分らないこと言われるわ、酒ぶっかけられるわで、我慢の限界を超えてたらしい。気がついたら君の前で素を出してた。こんなこと今までなかったから、自分でも驚いた」

後をつけられるのも、酒をかけられるのも、どっちもすごい経験だと思っ。そう考えたら、動揺してキャラを忘れてしまうのも仕方ないように思えた。

お互いに黙り込んでいたら、注文していた焼き鳥の盛り合わせが運ばれてくる。

それぞれの前に置かれた皿には、モモ肉のタレと塩が三本ずつ載っていた。

「……とりあえず食べるか」

「そうですね」

炭火で焼いたお肉は、ジューシーで柔らかくてとても美味い。

「んー、美味^{おい}しいです」

「だろ。ここの焼き鳥は旨いんだよ。昔から好きでね」

「そういうえば、このお店の店主さんかな、両角さんのことを『両角のぼうず』って言うてましたけど、そんなに昔から来てるんですか?」

「ああ。祖父の代から世話になってる……俺が最初に来たのは小学生の頃だったな。あの頃からずっと、おやじさんには『両角のぼうず』って呼ばれてる」

「へー、そうなんですね。ここ、カウンターだけかと思つたら、奥に個室があつて驚きました。人に聞かれたくない話をする時とかにいいですね」

「そういう意図で作られたらしいぞ。密会用つて」

え、本当にそうなんだ。

「俺もおやじさんから聞いただけだが、この辺りにある企業の重役達が情報交換の場として利用しているらしい」

「なんか私の日常とは、別の世界の話みたいですね……」

「そんなことないだろ。現に今、ここで人に聞かれたらマズい話をしてるんだし」

そして両角さんは、急に真剣な表情を浮かべた。たちまち場の空気が引き締まる。

「俺の人生がかかっている。キャラを偽^{いつわ}っていることは内密に頼む」

真顔でお願いされてしまうと、こっちもついづられて真顔になる。

私は食べる手を止めて居住まいを正すと、真っ直ぐ両角さんを見て言った。

「約束します、誰にも言いません。……それに私、会社で親しい人はそんなにいないので」

「親しい人がいない……? それはそれで大丈夫なのか?」

彼の心配を払拭^{ふっしょく}しようと思つて言ったのに、逆に心配されて苦笑いだ。

「こっちに戻つてきてからまだ日が浅いからです。ご心配いただかなくても大丈夫です」

念のため言っておくが、私にだってちゃんと友人はいる。

ただ会社では、仲のよかった同期は私が研修に行つている間に会社を去つており、今は親しい付き合いをするような同僚がほとんどいないというだけだ。

焼き鳥を食べながら膨れる私に、両角さんがニヤリと笑つた。

「まあ、うちの社員にバレたのは想定外だったけど、バレたのが浅香さんでよかったですよ」

そんなことを言われて、私の胸が小さく疼^{うず}く。

「そ、それはどういう意味で……?」

「バーで一人、心底旨そうに日本酒と焼き鳥を楽しむ人なら、俺としても接しやすい」
両角さんが笑いを噛み殺しながらしみじみと言う。

褒められているのかけなされているのか実に微妙なところだ。でも、仕事帰りの一杯が至福という干物生活を送る私に、色気など皆無。自分でも、彼の言葉に納得だ。

——普段女性からキヤーキヤー言われているような人だからね、私みたいな色気のない女の方が気を使わなくて楽なことなんだろう。でも、私も同じかもしれない。

初めて両角さんに会った時、すごく話しやすかった。居酒屋で顔見知りができるのは珍しくないけど、彼とはまた一緒に飲みたいと心から思った。

「まあ、お互い様ですね」

こうして両角さんのことを知った後も、最初の印象は変わらない。やっぱり話しやすくて、飲み仲間としては最高だ。

「だが……もしバラしたら、その時は……分かるよな？」

急に雰囲気を変えた両角さんに、私は思わず息を呑んだ。

「……ど、どうなるんでしょう……」

おっかなびつくり尋ねると、両角さんが顎に手を当てて私を見る。

「……襲うかな」

想定外の答えに、私の顔が引き攣る。

「なんてな。冗談だよ」

「……………心臓に悪い冗談はやめてください……」

とはいえ、私は次期社長の秘密を知ってしまったわけなのだ。こうして、本人が直々に釘を刺しに来るくらい、重大な秘密を。

——絶対にないけど……万が一、秘密を誰かに話したりなんかしたら、私、クビ……………?

その可能性に、内心恐々とする。

本社に戻ってようやく仕事にも慣れてきたところだし、家の近所にお気に入りのお店も見つけて充実した毎日を送っているのだ。

私は、何があってもこの生活を手放したくない！

「絶対に口外しません!!」

「どうもありがとう。助かるよ」

両角さんがそう言っただけで深々と頭を下げてくる。

その顔は王子様のようにキラキラしていて美しい。なのに、その綺麗な顔を怖いと思ってしまったのは何故だろう。

——本社に戻った早々、とんでもない面倒事を抱え込んでしまった……

背中にてっかい重りを乗っつけられたような気分のまま、拒否権のない連絡先交換をし

て、密会はお開きとなった。おまけに今夜も両角さんにご馳走ちそうになってしまい、こっちは恐縮おそくしきりだ。

「今夜はこの後、用があるから家まで送れないんだけど、大丈夫か？」

店を出たところで、両角さんが私に尋ねてくる。

「大丈夫です、すぐそこが駅ですし」

「じゃあ……気を付けて」

「はい。ご馳走ちそう様でした」

一瞬だけ口元に笑みを浮かべた両角さんは私に背を向け歩き出す。

——えらいことになってしまった……

私はハアアと大きくため息をついて、とほとほと家路についたのだった。

三

我が社の王子様は両角さん。だけど思いっきりキャラを作っていたことが発覚。

私とその秘密を知ってしまったから、数日が経過せいごした。

最初こそ、うっかり漏らしたらどうしようと思おもって戦々恐々せんぜんきょうきょうとしていたけど、よくよく考

えたら両角さんは常務だ。平社員の私とはフロアも違うし、よほどのことがない限り会社で絡かかむことはない。

つまり、会社で彼の話題を出さなければ何も問題ないということだ。

そのことに気づいてからは特に気負うことなく、平常心で仕事ができた。

——そうだよ、顔を合わせなければキャラの違いに戸惑とまどうこともないじゃない。

現に、あれから会社で両角さんの姿を見ていない。噂はガンガン耳に入ってくるけれど。

王子様がどここの定食屋で食事していたとか、いつも飲んでいるコーヒードこの店のものだとか、みんなよく見ている。

——ほんと、改めて両角さんの人気のすごさにおののくわ。

会社帰りに、最寄り駅近くのスーパーの夜市で、私は値引きされたアジの干物をカゴに入れながら深く頷く。そして、会計を済ませて自宅マンションに向かった。

私が住んでいるのは、女性専用のワンルームマンション。ベットも飼えるので、たまにエレベーターでベットを抱えた女性と会ったりする。

ちなみにこのマンションは男性のお泊まりは禁止。たとえ親兄弟でも男性がこのマンションに泊まることはできない決まりだ。

三階でエレベーターを降りて、中ほどにある自分の部屋に入り電気を点ける。まだ

立ち読みサンプル はここまで